



日本記者クラブ
シリーズ企画「3.11大震災」

福島に生きる 福島を生きる

和合亮一 詩人

2012年3月27日

震災6日目の昨年3月16日夜。見えない放射能の恐怖、慌ただしく避難する人たち、食料やガソリンも底をつく。「これで福島も、日本も終わりだ」と考えた詩人の和合亮一さんは、この絶望感を誰かに伝えたい、死と滅亡が傍らにある時を言葉に残したいと、ツイッターに詩を投稿した。

「放射能が降っています。静かな夜です」「この震災は何を私たちに教えたいのか。教えたいものなぞ無いなら、なおさら何を信じれば良いのか」。

ひっきりなしに襲う余震の中、泣きながら打ち込んだ言葉は人の心をつかみ、短時間で1万4000人を超えるフォロワーを生み出した。ツイッターから生まれた詩は「詩の礫」「詩ノ黙礼」という詩集になった。その後も被災地を訪れ、福島を生きる被災者と対話を重ね、精力的に詩集などを刊行。ノンフィクション作家の佐野真一さんと対談「言葉になにができるのか」は震災後7冊目の出版になる。

ふるさとをあきらめない。そのためには何が必要なのか。福島にとどまり、福島から発信を続ける和合さんは熱く語った。「すべてをありのままに記録し、未来の福島の子どもたちにそのまま手渡していく。それが橋を渡すことなのだと思う」と。そして、すでに始まっている風化にあらがうために、「福島から外側の人に言葉の橋を架け、話を伝えたい。そうしないと福島は生き残れない」と。

司会：瀬口晴義・日本記者クラブ企画委員（東京新聞論説室論説委員）

日本記者クラブ Youtube チャンネル

http://www.youtube.com/watch?v=x0XyL9cssHs&feature=plcp&context=C4e9bd8cVDv.jVQa1PpcF0h_oCUH99N2SsKdF.jxzdtw8vyY111CfA%3D

©公益社団法人 日本記者クラブ

**司会：瀬口晴義・企画委員（東京新聞論説室
論説委員）**

3.11 シリーズに本日は詩人の和合亮一さんに来ていただきました。皆さん、ご存じだと思いますが、和合さんは福島市内にお住まいで、県立高校の国語の教員をされながら詩を書かれています。

1999年に中原中也賞を受賞され、1年前の東日本大震災の直後からTwitterで詩を発表し、非常に注目されました。そのときの内容をまとめた最初の詩集が『詩の礫』です。それに続いて『詩ノ黙礼』、これもTwitterでつぶやかれたものです。その後に『詩の邂逅』という詩集が出ました。

これを和合さんは三部作というふうにおっしゃっているのですけれども、ことしの2月以降、相次いで出版されています。詩集だけでなく、インタビュー集や対談集など幅広く出版されています。2月に『ふるさとをあきらめない フクシマ25人の証言』というインタビュー集をまず出されて、その後に『ふたたびの春に』という本が出ました。これは、震災からの1年を詩とエッセイでつづっています。『私とあなたここに生まれて』という本は南三陸在住の写真家の写真と詩のコラボレーションです。そして、きのう出たばかりの本が佐野真一さんとの対談の『言葉に何ができるのか』です。

非常に精力的な創作活動をされている和合さんにきょうはお話を聞きたいと思います。

40分ぐらいお話をさせていただいて、後で皆さんからの質問も受け付けます。では、よろしくお願いします。

和合さん お忙しいところ、お集まりいただきまして、ありがとうございます。これからしばらくお時間をいただきましてお話をさせていただきたいと思っています。

詩人がこういう形でお話しさせていただくというのは、これまでほとんどなかったそうで、どんなふうにお話しさせていただいたらいいかと思っているのですけれども、いま、ご紹介いただきましたように、昨日、佐野真一さんとの対談集『言葉に何ができるのか』という本が

書店に並びまして、1年間で7冊本を刊行させていただきました。それがちょうどたまきのものでしたので、大変よいタイミングでお話しさせていただけると感じて伺いました。

自分なりに1年間を振り返って震災七部作ということで、自分の中では一つ形をみたかなというふうに思っています。『詩の礫』、『詩ノ黙礼』、『詩の邂逅』という3冊は6月中旬ごろに出させていただいたのですが、これは前期三部作といいますか、詩集の三部作でした。それに比して、後期四部作といたらいいのか、4冊、形になりまして、それをいまからお話しさせていただきたいと思います。

Twitterで「詩の礫」

私は、3月11日は職場におりました。高校の教師をしておりまして、職場のほうで入試の判定会をしておりました。いよいよ合格者を、あした決定するという大事なタイミングであったのですが、これまでにない大きな揺れを感じて、先生方と避難をしました。

それから学校が再開するまで3カ月近くかかり、連休が終わってようやく学校に戻りました。しかし、学校も、大きな校舎が2つあったのですが、片方は損壊が甚だしくて、立入禁止の判断が下りました。それで体育館のほうで授業を秋の入り口まで続けました。3月1日に3年生を卒業させたばかりなのですから、最後に生徒たちに、体育館で授業をした話をして、涙が出てしまいました。

体育館というのは、本当にうまくできているというか、できてないというか、暑いときは暑い、寒いときは寒いのです。体育館に教室を仮につくりましたけれども、やっぱり仮なのです。壁というのはベニヤ板一枚ですので、話をしている内容が全部聞こえるということで、私が何か話をしていると隣のクラスみんなも聞いているという状況でした。こうした中で過ごしたことが、ある意味思い出になって、生徒たちと別れるときにもう一度肩を抱き合ったということをいまも記憶しております。

3月16日から僕はTwitterで『詩の礫』という詩を書き始めました。そして、その後1カ月近く、放射線量が高いということもあり、あと福島の方々が避難をしていったということもあって、外にあまり出られず、ライフラインは止まっておりましたが、辛うじて助け合って何とか3月は過ごした覚えがあります。だから、きょうも東京に伺うときに、去年のいまごろ、こういう気持ちだったなというのを思い出しながら外の風景を眺めて参ったのです。

4月1日になってからようやくガソリンが手に入りまして、私がよく幼いころ遊びに行った、そして6年間、教師として子どもたちと触れ合っていた南相馬市のほうにまず行ってみました。しかし、家族は心配するのです。まだ余震はずっと続いていますし、行ったときに大きな地震があって、また大変なことになったらどうするのだと。原発ですら、いまでもなお心配がありますが、そのときは大きなことがもっと起きるのではないかというふうなことを福島の皆さん、常々思っていましたので、浜に行くのもある意味で少し決意を固めながら行ったのです。

そのときに、これまでTwitterに書いていた『詩の礫』と『詩ノ黙礼』というのが、お手元の資料にあるのですが、赤の詩集が『詩の礫』です。これが僕が一番先に始めたもので、放射線量が高いということや、地震の被害が大変甚だしいということ、さまざまなこと、地震の報道や新聞や、耳に飛び込んでくるもの、目に飛び込んでくるものをとにかく毎日書きとめて、それをTwitterで発信したものです。最初は170人ぐらいのフォロワーだったのですけれども、現在は2万人ぐらいの方が読んでくださっているのですが、それをまとめたものが『詩の礫』になります。

それとほとんど同じ時期に、相馬に行って、亡くなったたくさんの方々の存在を、改めてこの目でみて感じ、そして私が暮らしていた港町は完全に崩壊し、瓦れきの中にありました。住宅街に行くと、もう家のたたずまい、住宅地のたたずまいというものが消えうせていて、車や家やランドセルや机や、さまざまなものが散乱

している瓦れきの荒野をみたときに、亡くなった方に思いを届けたいというふうに思って、それで『詩の礫』と並行するようにして書いたものが『詩ノ黙礼』というシリーズでした。

『詩の礫』のほうが先んじてなのですけれども、これは1人で部屋にこもって、みるもの、聞くもの、感じるものをずっと記録した記録集です。それに対して『詩ノ黙礼』というのは、外に出るようになって、そして外の世界とのつながりを改めて自分の中で目覚めて感じたときに、もう一度文学が返ってきた、そんな思いが自分の中にありました。それまで20年間ずっと詩を書き続けてきたのですが、もう一度文学というものを自分で求めたいというふうに思ったのです。

教え子が行方不明

これまでずっと一緒に暮らしていた仲間や家族、私の教え子のお母さんなども流されています。あと、僕の教え子で警察官になった者が富岡町で流されていて、まだ行方不明です。

そういう一つ一つのことがあって、ついこの間まで目の前にいた知人や友人がほんの一瞬で別の世界、あたかも水平線の向こうの世界に行ってしまったように思って、いまなら亡くなった方と話ができるのではないかと、そんな思いを『詩ノ黙礼』というものに込めました。

これが赤、これが白という表紙なのですけれども、表紙にも象徴されるように、全く対照的な2冊が自分の中で6月にでき上がったと思っています。

いわば『詩ノ黙礼』が死者との対話というふうに自分で思ったことに比して、もう一冊の『詩の邂逅』は、生者との対話というふうに自分の中では大きくありました。

この表紙は黄色の表紙です。僕が『詩ノ黙礼』を書いているときに、現地に行って、そして実際教え子とか知り合いとか、あるいは昔の友達に会いに行って話をし、話をしているうちに何か力をもらいました。僕もそういう意味では被災者の1人なのですが、現地の被災者の方々

からその言葉に明かりをいただいたような、そんな気持ちでいました。

そして、被災者の皆さんは、南相馬市では、物資が届かない状況だったり、相馬ではたくさんの方が避難して残っている状況でしたが、そういう中でも、ふるさとに残って生きていくのだという話をされていた。あるいは富岡町から避難所や、当時2,500人ぐらいたったビッグパレットという郡山の避難所にも行って、知り合いの方とお話をしました。避難所にいながら、それでもいい言葉をかけて、そしていい言葉を信じて言葉に橋をかけるようにしていれば、必ず相手の方はいい言葉を返してくれるということをその方はおっしゃっていたのです。

言の橋をかける

避難所、郡山のビッグパレットに行ってから周りの方が大変げすぎすぎして、ここにいることが大変つらい、もう死んでしまいたいという気持ちでいたそうなのです。そのときに、ボランティアの方で「一日じゅう話を聞きますから、どうぞ話をしてください」という方がいらっしゃって、そしてずっと一日じゅう話をしていた。そしたら、一日ずっと話をしていた空っぽになった。その日はそのまま眠ったそうなのですが、翌朝起きたときにすごく力がわいてきて、私もだれかのために何かをしようと思ったという話を聞いたのです。67歳の女性の方でした。

そのときにその方が「言の橋」というふうにおっしゃったのです。言葉には橋があるのだ。いい言の橋をかければ、必ずその橋を渡って相手の方が近くに来てくれる、そんなふうになっている、というふうに67歳の女性の方はおっしゃっていて、言の橋、橋という概念がそれから後の自分の中でとても重要なものになっていったのです。

宮澤賢治の詩にこういう一説があります。

新たな詩人よ

雲から光から嵐から

新たな透明なエネルギーを得て

人と地球にとるべき形を暗示せよ

それをみたときに、僕は、『詩の礫』が嵐で、『詩ノ黙礼』が雲で、『詩の邂逅』が光というふうに分けて思いながらこの3冊を自分なりに受けとめてきました。

それを6月に出させていただいた後、まずインタビューということが続けました。これは『詩の邂逅』の中で対話と詩という構成になっています。吉永小百合さんが非常にこの1冊を気に入ってくださり、先日もオックスフォード大学で坂本龍一さんと共演して朗読してくださったりしていて、大変感謝しています。

『詩の邂逅』は、7人の被災者の方に話を聞きに行って、その話を受けとめて私が作品にしたものです。それが終わってからも、被災地の方の話を記録としてとっておくということが続けたいと思いました。僕は、ある話をうかがってそう思いました。

チェルノブイリに鎌田實さんと一緒に行った僕の友人がいました。僕は後で聞いて、やっぱりそうだったんだなと思ったのですけれども、チェルノブイリに行って当時起きたことを質問したそうです。

僕の友人は、当時25年前のチェルノブイリ爆発、どうだったかということを知ろうと思ったのですが、現地の方は大体の方がこういったそうです。「いやあ、やっぱり昔のことだから覚えてないな」と。それを聞きに行ったのに、いろんな方に聞いても、「いやあ、やっぱり細かいことは忘れてるな」という話だったそうです。その友人は私の教え子で、彼は飯舘村でいま、若者のリーダー的存在でいるのですけれども、彼は、僕がやっている記録をするということについて、とても重要なことなのだと言っていて教えてくれたのです。

4冊目になりますが、『ふるさとをあきらめない—フクシマ、25人の証言』という本を6月、詩の三部作が終わってから、編集の方の励ましをいただきながら、こつこつ聞いて回って

きました。

ここで聞いている相手の方というのは、インタビューをあまり受けたことがない方々ばかりでした。私ももちろんインタビューをしたことがないということで、そういう意味では、お互い経験がない状況で声の記録をとってきたのですけれども、さまざまなことがこの中で語られています。

細かい部分に真実が見える

例えば、原発が爆発したときに3kmの範囲で病院勤めをしていた婦長さん。「14日の3号機爆発のときは本震と思うほどの大きな揺れだった。そして駐車場で作業をしている人は、その爆発のショックで倒れてしまった、あるいは髪がうえに上がってしまった。そして爆発した後は何ともいえない、いいにおいがした」といような話をされていたのです。僕はそれを聞いて、そういう細かいところに真実がすぐみえるような気がしまして、さらに話を聞いていくというふうなことを続けていった。

あるいは、果樹農家の阿部さんという方は大規模な果樹農家ですけれども、放射線量が大変に高く、400本近くのリンゴや桃の木が出荷停止になった。けれども、自分でとにかく除染をするということを阿部さんはやってらして、いまも自分なりに除染の作業を試みていらっしゃる。阿部さんのお気持ちというのは、とにかく一番は果樹畑で孫を遊ばせたいということなのです。

僕は、農家の方を何人も取材したのですけれども、やっぱりおじいちゃん、おばあちゃんが一番の楽しみというのは、孫に自分のつくったものを食べさせて、そしておいしいといってもらえることなのだということです。

それがいま、できない。けれど、自分はそれができなくても、とにかく果樹畑で孫を遊ばせるぐらいのことはしたい。そして子どもがここで遊んでもいいよというふうに果樹畑を開放したい、そんなふうな話をされていらっしゃった。

先ほど僕が引いた「嵐、雲、光」というこの言葉は、宮澤賢治の言葉なのですけれども、果樹畑を開放して子どもたちを遊ばせるというのも宮澤賢治の童話にあるのです。度十公園林。僕はそれを聞いたときに、また宮澤賢治の姿が浮かんできたのです。

あるいはいわきの漁船の漁師の方で、馬目さんという方がおっしゃるのですけれども、「とにかく海はまるでほったらかしなんだ」と。僕が行ったとき、「とにかく海はほったらかし、漁業組合はほったらかしなんだ。いまだに東電の方も行政の方も組合に一度も顔を出さないんだ」という話を9月の終わりぐらいに聞いたのです。そして、「原発からは大量の水が海に流れ込んでいるんだ。だれも報道していないだろう。けれど、間違いなく海にいっぱい流れ込んでいる。その水の量といたら、とても膨大な量なんだ」というふうに馬目さんは去年の9月におっしゃっていました。

きのうだったでしょうか、2号機から海に水が大量に流れているという報道がありました。地元の漁師の方は、そういうふうな話をもう9月ごろされていまして、そして、「何であんなところに原発をつくったんだ。あそこは危険な場所で、地元の人だれも泳がないんだ。そういうところに一番安全だからといって原発をつくっているんだ」。そんなこともおっしゃっていて、…そんなところにつくったんですかと改めて思ったのですけれども、そういうふうな地元の方のお話です。

例えば桃のことにしても、その桃をつくる人がいます。その桃を売る人もいます。僕は、あるとき、河原でたくさんの果物が捨てられていて、そして果物が山になっていて腐敗している様子を見たことがあります。それを僕は取材に行ったとき尋ねたら、多分地元の農家の方がどうしようもなく捨てたんだろうとおっしゃっていました。

福島の桃というのは贈答用で、普通の10倍ぐらい肥やしにお金をかけます。僕の親戚は、サトウキビを肥やしにして贈答用としてつくっていました。それを10分の1ぐらいの安い値段で売っている。けれど、だれも買ってくれ

ない。だけど、桃を売るという人でもまた闘い
があって、売れ残った桃でも食べてもらわな
かったら、つくった意味がないというふう
に思われている。JAの組合長の方にお話
を伺いましたけれども、朝まで作業をして
トラックで全国に配送して、とても安い
値段で買ってもらって、食べてもらうと
いうことに命をかけた方もいらっしやる。

河原に捨てられた桃

話をうかがいますと、全国で一番桃を買
ってくれたのは、長崎の方だとおっしゃ
いました。桃の中には放射線の数値が、
わずかではあっても、あるのは間違い
なくあります。だけど、それを長崎の方
はちゃんと理解されているのか、これ
ぐらいだったら大丈夫だということで、
長崎の方がたくさん買ってくれた。そ
んな話もされていました。

そういう考えの方もいるし、もう一方
では、値段を下げてしまうと福島のブ
ランド、福島の価値観が下がってしまう
ということ、意地でも値段を下げない
で、そして福島の市場の方で売って
いる、そういう店長さんの話もあり
ました。

だから、僕は25人の方に話をうかが
って、そして『詩の邂逅』もプラスす
ると全部のべ33人の方なのです。実
は本に入れられなかった1人の方が
いらっしやったのですけれども、実
際のところ、のべ33人の方に話を
聞いてきたのですが、僕の知り合
いから始まって、直接知らない方、
新聞でみて知った方、あるいは紹
介していただいた方、福島県の全
域、いろんな職業、いろんな年齢
層の方に聞きました。だけど、そ
れを聞いていて、みんなつながって
いくのです。それがふるさとをあ
きらめない、そういう気持ちの中
でつながっていくような、そう
いう気持ちでまとめた1冊だった
です。

僕は全国でいま、いろんな形でお話
をさせてもらっています。おととい、
神戸から帰ってきたところ、神
戸でお話をさせていただくと、
被災地同士ということで気持ち
がつながるよ

うに思います。僕が話をすると、皆
さんが、17年前の話を逆にしてく
ださる。そういうふうな印象があ
りました。

場所によっても全然違っても思
いました。例えば静岡のほうに1カ
月前ぐらいに行ったとき、一番静
岡の方がメモをとる姿勢というの
は、原発が爆発した後の生活につ
いてなのです。

地震が起きて、原発が爆発して、
福島で戒厳令のようなものがしか
れて、外には出ないように、不用
意な外出は避けてくださいと。福
島に残った人たちには、そんな
ふうな情報がありました。雨はた
くさんの放射性物質を含んでいま
す。雨にはさわらないようにして
ください。あと、風下に立たない
ようにしてください。ちなみに
風向きはくるくる変わりますと
いわれて、風下に立っても非常
に不安なのです。そういうふう
なことがあったりしたのです。

あるいは、水道の水がとまってい
ますので、水をもらいに朝、給
水車に並んだお話とか、食料、
ライフラインがとまって、どん
なふうに住生活したかという話
をすると、静岡の方は大変何
か違うように思うのです。それ
から神戸に行った、静岡に行
った、あるいは東京に行った、
その場所によって全然違うの
だのと改めて思うのです。

仙台に行きますと、津波の被害
で大変な思いをされた方が涙を
流して聞いている。そういう
印象も受けとめて改めて考え
ますと、この震災というのは、
複合震災なのだとかやはり思
うのです。だから、複合震災に
立ち向かうにはどうしたらいい
のだろうと、この『ふるさとを
あきらめない』のインタビュー
をしながらずっと考え続けて
きました。

この『ふるさとをあきらめない』
という1冊をまとめながら、別
の2冊を詩集としてまとめ
ました。『ふるさとをあきら
めない』は4冊目で、5冊目
が『ふたたびの春に』、6冊
目は『私とあなたここに生ま
れて』です。それぞれ成り立ち
が違います。インタビューを
して、いろんな方と対話をし
ていくうちに、自分の中で詩
を書くその心の向きかげん
というのがまたでき上がって
きたからです。

まず、『ふたたびの春に 震災ノート』という本は、僕が手帳にメモしていた詩をもう一度1年を振り返ってまとめた1冊です。手帳にメモしてありますので、断片がそれぞれあって、その断片を詩の形にして、そして手帳にメモした日付と場所も記しました。そういう意味では、もう一つの『詩の礫』といってもいい1年間の記録集をつくることにしました。

対話で呼び覚まされたリアリティ

それは、『ふるさとをあきらめない』というインタビュー集を通して、記録をするということの大切さを改めて感じて、そして話をしているうちに、自分のリアリティというものが、Twitter や手帳に書いていたそのリアリティというのがもう一つ呼び覚まされてきました。つまり、自分の1年間の足取りというものが、インタビューをしながら対話している方々のお話の中で目覚めてきたのです。だから、相手の方がお話ししているものを聞いているうちに自分の時間が呼び覚まされてくるというか、喚起されてくるというか、相手の方が話しているのは、そのときの自分なのだというふうに思うようになってまいりました。そのときにもう一度詩集をまとめたいと思ったのです。

『ふたたびの春に』というのは、1年分の自分の手帳の断片をまとめてきたものです。だから、手帳にずっと書き続けてきたものです。それを1冊にいたしました。

これは、いま、お話しした阿部さんという果樹農家の方のインタビューに行った後に書いたものです。

苦難

肌がとられていく

剥がれていく

激しい寒気の真冬に

除染されて 樹皮を削られた私たち

新しい皮膚が

どこかからやって来るまで

裸にされて

寒風にさらされている私たち

この痛みを知って下さい

奪われた何かをわかって欲しい

夏には たくさんの果実が河原に山積みに

捨てられて 腐乱していったことを

耐えるしかないのか

樹木よ 精神が 血を流している

涙を流している 私たちは

それでも 立ち尽くす木なのだ

これは、阿部さんにどんな除染をしていますかという話をしたときに、つまり、かわいがっている一本一本の木の皮をはいでいるわけです。そして、うへの土を掘っているわけです。その話を聞いて家に戻って書いたものなのです。

そういう意味で、自分が受けたものをありのまま、そのままに書くということは自分の中で続いていたのだ——その手帳があったからなのですけれども——やっぱりまとめるべきなのだ改めてこのとき思いました。

その中で編集の方に気づかせていただいたものがあります。11月27日にテレビの取材で原発の20km圏内に入らせていただきました。戻ってきてからすぐ詩を書きました。戻ってきてからすぐ書いた詩と、しばらく時間がたってから書いた詩、その2つを編集の方におみせしました。つまり、戻ってからすぐに書いた詩というのは、いま、お話ししたように、ありのまま、そのままに書いている詩です。1カ月ぐらいたってから書いた詩というのは、ある意味、詩なわけです。思い出しながら書いている。

その編集者の方におみせしたところ、「戻ってきてすぐに書いた詩のほうが、断然いい」と

いわれました。その理由を聞いたところ、「こっちの、戻ってきてから書いた詩は、詩ですよ」といわれたのです。けれど、一応詩集なので、詩でいいのではないかなと思ったのですが、「いや、これ、詩ですよ」といわれて、そのときに大事なことに気づかせていただいたなと思ったのです。震災以降の文学として最も大事な一つをそこで気づかせていただいたように思ったのです。

つまり、ありのまま、そのままに書くということは、時間もそのままに書くということなのだ。1時間とか、時間を決めるのはおかしいですが、年月がたってから書くものというのは、もっとイメージが入ってくるのだなと思ったのです。そういうふうな気づきを『ふたたびの春に』という1冊は私に与えてくださいました。

幸福の中の悲しみ、悲しみの中の幸福

もう一冊は『私とあなたここに生まれて』というもので、ほとんど『ふたたびの春に』と同じ時期に出た詩集です。南三陸の自転車屋さんを営まれている方が、震災前からずっと南三陸の風景を撮られていました。その写真が1,000枚近くあり、それを私に送ってくださった。私はよく夏休みに南三陸に遊びに行っていました。南三陸の黒い津波の映像をテレビでみるにつけ、南三陸にいろんな思いを持ってきました。長い長い詩の断片をずっと書き続けていました。

『私とあなたここに生まれて』という詩集をつくるときに、『ふるさとをあきらめない』というインタビュー集のことを思い出しました。つまり、そこに生まれて、ふるさとをあきらめないという感覚というものを南三陸の方々の気持ちを思いながら書きました。

これは写真と詩の、いわゆる写真詩集ということで、南三陸の写真と詩が2つ組み合わさってずっと続いています。こういうふうな形で1本の映画のようにつくったのですけれども、そこにその方が撮った震災前の風景と震災の後の風景がほとんど肩を並べて1冊になってい

ます。

私は、1冊編むときに作業をしていて気づいたのですが、つまり、震災前の幸福と震災後の悲しみを並ばせることで、幸福の中にある悲しみというものと、悲しみの中にある幸福というものがまざり合うのです。まざり合ったときに、それを受けとめながらも前に進もう、そういう気持ちが起こるのだなと思ったのです。つまり、並べることが必要なのだというふうに改めて思いました。

希望のみを語る、あるいは絶望のみを語る、どちらかにどうしても向いてしまうかもしれません。けれど、僕はこの1冊、『私とあなたここに生まれて』ができたときに、それが2つ肩を並べることでまざり合って、幸福の中を通した不幸と不幸を通した幸福の2つがみつめ合うときに一步を踏み出せるような、そういう印象をこの1冊はまとまった形で私にも手渡してくれたように思っております。

きのう書店に並びました『言葉に何ができるのか』というものは、七部作の最後になります。佐野眞一さんと9カ月近く対話を続けてまいりました。3.11以降、佐野眞一さんのとらえ方でいえば、“精神の瓦れき”が日本じゅうに散らばっている。精神の瓦れきの状態が日本じゅうに広がっていて、想像力や思想がいま、枯渇している。そのときこそ何かを語るべきなのではないか、この切実な気持ちを語るべきなのではないかとおっしゃってくださった。

そして、僕はいま、お話しさせていただいたように、ありのまま、そのまま『ふるさとをあきらめない』とか『ふたたびの春に』、『私とあなたここに生まれて』の3冊の中で感じたノンフィクション、ドキュメント性というものを佐野さんから学びたいと思ってずっと対話を重ねてきました。

佐野さんはこんなふうにおっしゃいました。何か対象に迫ろうとするとき、例えば人間に迫ろうとするなら、その内臓を書く。風景に迫ろうとするなら、その地層を書く。そして大文字の真実ではなくて、小文字の真実、例えば新聞や報道に載らないような、そういう小文字の真

実をとらえて形にしていくことが一番大事な
ことなのではないかとおっしゃっていました。

僕は、ドキュメントが先行していくというふうなことを、この1年間を振り返るととても大切に思ってきました。そもそもTwitterという仕組み自体、思い返せば記録媒体として私に何かを与えてくれたと思っています。だけど、その記すということの継続力のためにはどうい
うものが一番必要なのかと思ったのですが、大文字の事実でなく小文字の事実なのだと思います。もっとい
うと、媒体として上げられないような事実を探し続けていくこと。つまり、詩を書くということ。瓦れきをつまみ上げるとい
うこと。小さな小石をつまみ上げるとい
うこと。つぶてを拾い集めるということ。小さな小さな箱に小さな小さな真実を詰めて、そして積み上げるとい
うこと。それが最も自分にとっては大事なことなのだと。

福島が抱えている複合震災は、これからもずっと続いていって、いま、廃炉まで30年、40年といわれていますが、本当に30年、40年ですべてが片づくのか。全くそんなふうに思っておりません。

これから、子孫あるいは孫の代までふるさとをあきらめずに福島に残り続ける、そのために何が必要なのか。私は、すべてをありのまま、そのままに記録していって、そして未来の福島の子どもたちにそれをそのまま手渡していく。そのために、いま、いろんなことが目の前にありますけれども、一つ一つ形を与えていって、それを私なりにこれからの福島の未来の子どもたちに手渡す方法を真剣に考えていきたいなと思っています。それが橋を渡すことなのだと思います。

福島から橋をかける

福島は、いま、1年がたって、たくさんの方からたくさんの支援の手をいただいて、たくさんの橋をかけていただいております。いままで僕はずっと福島で暮らしてきて、こんなに人の気持ちが温かいと思ったことはありません。同

時に、さまざまな温度差が生まれていて、日本国じゅうさまざまな温度差があって、その温度差というのは、実は福島県内でもあります。同じ近所の中でもあります。一人一人、津波を経験した人、原発の避難を経験した人、職を失った人、それぞれの温度差の中で暮らしています。

やっぱり必要なことは橋なのです。気持ち、温度差を抱えている中でどう橋をかけるのか。僕は、やっぱり言葉の橋なのだと思います。そして、橋をかけられることを待つのではなくて、福島から橋をかけていく。つまり、内発する真実を酌み取って、その中で構成し、組成し、橋をかけ、その橋を渡って行って外側の人に話を、声を熱くして伝えていく。そうでなければ福島は生き残ることができないのではないかと。そこまで切迫した気持ちを最近、1年を振り返って思っております。

ありがとうございました。

《質疑応答》

司会 どうもありがとうございました。

最後は熱く語っていただいて、本当に感銘しながら聞いていました。私のほうからお聞きしたいことがあります。

詩人という一般的なイメージというのは、非常に孤高の存在のようなイメージもあるんですが、和合さんの場合、非常に進化しているというか、いろんな人との対話、そういう行動によって触発され、また新たな成長を遂げていらっしゃるのだと、いま話を聞いて非常に感じました。

例えば25人の証言という本では、新聞記者やジャーナリストのようなことをやられているわけですが、そこまで深くかかわろうと思ったのは、何かきっかけとなどがあったのでしょうか。

和合さん 前期の三部作を出した後の6月中ごろだったのですが、これから先、何をしていくかということで自分に残ったのが、

『詩の邂逅』でさせていただいた対話だったのです。対話と詩を書くということが自分の中に残ったのです。その流れというのは、3月中は、放射線量が大体18~23マイクロシーベルトぐらいだったので、とにかく不必要な外出は避けてくださいというときに、ずっと家の中にいました。そして周りの人たちはみんな避難をしてみたのですが、僕は、父がちょっと体が不自由なものですから避難はできなかった。

避難所というのは、体の不自由な方とか障害を持っている方を入れてくれないのです。だから、重度の子どもさんを抱えている親御さんはたらい回しにされて、全部拒否されて、家に帰っている人が多いのです。そういう現状なのです。

僕自身、ずっと残らなくてはいけないというときに、ある意味、独房に入っているような、そんな印象があって、ずっと閉じこもっていました。うつ状態といいますか、追い詰められた気持ちだったのです。

相馬に行っているいろんな方と会うようになったときに自分の中で目覚めがありました。やっぱりだれかと会って話をし、その声の明かり、考えの道筋というか、導きというものをもらうということが、震災を肌で感じて考えることに一番必要なのだなと思ったのです。

だから、すごく閉じこもったところからもう一度広がっていくということに改めて目覚めたのです。その目覚めがあったときに、自分の切符のようなものは言葉しかなかったということなのです。話をしながら一つ一つの言葉に光をもらったような印象がいまもあります。

司会 ありがとうございます。それでは、会場の方から質問をお受けします。

質問 和合さんの精神的な師匠は作家の井上光晴だと思うんですが、井上光晴は、現実に対して声を上げていく一方で、例えば戦争みたいなものをイメージに昇華したような小説を残していると思うんです。

あえてうかがってみたいんですが、和合さん

はドキュメントを超えて、詩をイメージに高めるとか、わけのわからない状態を何かわけのわからないような言葉に押し込めるとか、そういったことを今後考えていくような考えはありますか。もしくはそれが不必要と思われるのであれば、その理由を教えてください。

和合さん 僕はいま、お話ししたような方向でずっと進んできましたが、震災前は、「現代詩手帖」という雑誌にずっと連載をしていました。その「現代詩手帖」の編集長さんなどが場所をつくってくださって、いまお話があったように、この1年間体験してきた時間をイメージに進化させたような詩をまた書きましょう、つまり、震災前の作風の続きを書きましょう、というふうに誘っていただきました。

僕は、1年間ずっと、いわゆる現代詩は書かなかったんですけども、そういう場所に誘っていただいて、そして自分なりに書くことができたのです。それが自分の中でいま大きくあって、やっぱり時間が必要だった。例えば1年という時間が必要だったなというふうに自分で思っているんです。いま、お話しさせていただいた7つの書物とはまた別に、進化させた、深く考えたものでこれまで書いてきた暗喩の世界をこの1年間感じてきたものに落とし込んで、暗喩でもって福島1年をつづりたいと思っています。

具体的には「現代詩手帖」という雑誌の5月号から連載をして、秋には、自分がこれまでやってきた続きの現代詩——こういったらちょっと区別し過ぎかもしれませんが——そういうメタファーを中心とした本を1冊つくりたいと思っています。

あと、ちょうどきのう、あるラジオのラジオドラマのお誘いがあって、そのシナリオをおととい完成させてお送りしました。ラジオドラマのシナリオを書くということは、これまでなくて、いま、自分なりにお話しさせていただいたように、イメージを進化させたようなことも踏まえながら、短いものですが、物語をつくりました。ディレクターの方におみせしたところ、

とてもおもしろいというふうなお話をいただいて、ラジオですけれども、ドラマになる予定です。

僕は、物語というものにこの1年間は手を伸ばさなかったんですけれども、ひょっとするとこの1年、これだけ記録をつくりましたので、この記録をもとにつくっていくことに必要なのは物語なのかなと思っています。

僕は、小説を書いたことはないのですが、脚本は何度か書いたことがあります。高校演劇、演劇部の顧問なので、書いているのですが、物語というものを書くということも自分で新しい挑戦してみたいなというふうに、いま1年たって思っています。

司会 ますます進化を遂げられるというか、非常に楽しみであります。ほかにご質問はありますか。

質問 あなたより三十数歳うえの年齢の者であります。率直に申しますと、今までお話しをうかがって来て、最後のほうでちょっと詩人だなという感じはしたんですが、その前の本の紹介とか何かはあまりにも通俗的過ぎて、この人は詩人なのかなとちょっと疑問に思ったんです。

詩というものは文学の最高のものだと思っています。詩というものは、短い言葉の中に最も凝縮された世界があるわけですから。そういう感じを最後のお言葉の中でちょっと感じたので、やっぱりその点は詩人かなという感じもしたんですよ。

私が希望したいことは、もう少し詩の世界を凝縮され、昇華されて表現されるという部分があってもいいのではないかと。つまり、いまの社会は、Twitterなどいろいろありますが、しかし僕は、あんなものは情報であって、文学でも何でもないと思うんですよ。そのプロセスを経て、いよいよあなたの真骨頂の世界を表現されるというふうに期待しております。今後のご活躍をお祈りしますと同時に、私のいったことに対する反論をおうかがいしたい。

和合 僕が話したかったことをお話しただいたなと思っているんですけれども、20年間ずっと現代詩を書いてきましたので、いま、お話があったように凝縮とは何か、暗喩とは何か、完結とは何かということはずっと考え続けてきました。

しかし震災後、自分の中の絶対性が崩れました。僕は不条理をずっと書いてきました。いわゆる不条理でない現実に対して不条理の世界を書いてきました。シュールレアリズムという世界をずっと描いてきました。だから、僕は、西脇順三郎とか吉岡実とか、そういう世界をずっと追いかけてきたのです。現実に対して不条理を描いてきた人間であったんですが、目の前のあまりにも過激な不条理の現実に対して、不条理に対して不条理で立ち向かうことは無謀なことだなと思いました。

つまり、不条理に対してどんなふうに関わっていくか、それを自分で知るために一度自分を組成し直さなくてはいけないと思いました。組み直さなくちゃいけないと思いました。そのときに、不条理でなく、条理の中で自分の言葉、Twitter という媒体ではあるんですけれども、いままでにない直接的な、直截的な表現でずっと続いていきました。だから、いろんな方に「和合さんが書いているのは詩ではない」というふうにいわれました。近所の詩を書いているおじさんから私の職場に電話がありまして、「もうちょっと書き方があるんじゃないの。私はもう何年も詩を書いているんだけど」といわれたりしているのですが、あえてそれを受けとめています。

いまにみているという気持ちではなくて、この1年間、目の前にあったことをとりあえず形にすることができたので、これをまた自分の一つの足がかりにして、自分がずっと追いかけてきたものを昇華させていきたいなと思っています。

質問 これからが本番ですか。

和合さん これからが本番ですね。

質問 きょうはすばらしいお話をありがとうございました。

私も 3.11 の 1 周年の新聞を全部並べて感想文を書いているときに、あらゆる文書より詩は語れないことを語っているなというのを新聞の紙面からも感じました。ますますのご健闘を祈りたいと思います。

質問は、俗なことですが、先生は教師というお仕事、つまり、あなたの商売とどういうふうに両立をされますか。

和合さん これもよくうかがう質問なんですけれども、僕の中で、学校の教師をするのと詩を書くということは非常につながっているのです。結局、生徒たちに話をするときに言葉を選んで話をするわけです。あるいは悩んでいる生徒とか怒っている生徒をなだめたり、励ましたりするときにも、言葉を選んで話をしないと相手の心に届かないのです。そのことと、詩を書くことで言葉を吟味するということは全く同じです。

あと、特にいま、40 歳を過ぎて思うのですが、いままでずっと自分は若いと思ってきたのですが、一番自分にとって大事なこと、それは自分の文学にとって大事なことなのかもしれないのですが、教師をしていて一番いいのは、生徒たちの新鮮さと若さに触れるということなのです。彼らは本当に新鮮で、若さの象徴なのです。その新鮮さと若さに触れることで、あきらめないということ、言葉をあきらめない、詩をあきらめないということをずっと教えられてきたように思うのです。

国語の教師なので、文学作品を子どもたちに教えるというのが僕らの仕事なのです。子どもたちの反応はものすごいビビッドで、例えば森鷗外の『舞姫』を授業でやると、「太田豊太郎なんか最低」といったり、芥川龍之介の『羅生門』なんかは、最後老婆をけり倒しますが、けり倒した場面で、あー、こんな下人の気持ちはどうなんだろうと実際に子どもたちに聞いて、「下人のその後」というのを書かせたりしています。文学作品を研究者でもない、熱心な読者

でもない若い人たちがどんなふうを受けとめるのかと。そうすると、リサーチするためというふうなところもありますけれども、そうではなくて、それを読ませるためにすごく情熱を注ぐのが国語の教師なのですが、その読ませることが詩を届けるということに最後はつながっていています。だから、教師はずっと続けていきたいなと思っているのです。周りの方はみんな心配していますけれども、ずっと続けていきたいなと思っています。

僕は朝しか原稿を書きません。夜ははやくに寝てしまうのです。朝の 4 時から起きて 7 時までの 3 時間、朝に書きます。僕は、毎日、夜明けの時間に起きて原稿を書いているので、書くものに夜明けというのがすごく多く出てきます。特に完結な詩を書く、本当に完結なものを追いかけるときは朝のほうがいいんです。

夜はどうしてもだらだら長くなってしまいうんです。僕の話のようにだらだら長くなってしまいうんです。完結を求めるのはやっぱり朝だなと思います。朝起きたときに浮かぶものが自分の心のつぶやきというか、真実を語っているように思うのです。だから、朝起きての 5 分が自分にとってはその日の感覚の正念場といった方がいいんですか、その 5 分で自分の考えというのが先に進んだか、全然進んでいないかというのがわかる。だから、人間というのは眠りながら考えていることが非常に多いんだなと思っています。

朝 4 時から 7 時まで原稿を書いて、そして学校に行って生徒たちとワーッと過ごして、そして夜はビールを何杯か飲んでバタンと寝るのが僕の一日です。でも、生徒たちとワーッとエネルギーをぶつけ合うのが、ただ机のうえで何かを考えて書くということと両輪のような気がします。僕はそれで二十数年やってきたので、ずっと大事にしていきたいなと思っています。

質問 どうもありがとうございました。

詩風が変わられたという話です。シュールレアリズム、不条理詩から条理詩に変わられたということなんですけれども、それと、この 1

年で7冊の本を発信するというすごい発信力。質が変わったのと量がこれだけある。以前から発信力というのはこういう形であられたのか。今回7冊も書かれたことの背景に、和合さんが発信したのか、だれかに発信させられているのか、その辺をどうお感じになっているかというのが1点。

それから、橋渡しです。これから橋を福島から渡すということになると思うんですけども、しかし、世の中は非常に忘れっぽくて、これから風化が始まると思うんです。それに対して相当強力な橋を文学的に発信してほしいんですが、大変困難な作業かなとも思うんです。その辺のお考えはどうなのかということをお聞かせください。

和合さん ありがとうございます。まず最初のご質問で、僕は、20年間のうちに出した詩集が6冊です。だから、この1年間で出たのが7冊なので、20年分の詩人としての仕事をこの1年は1冊超えてしまったということに数のうえではなりません。

僕は、割合に詩をたくさん書くほうではありませんでした。谷川俊太郎さんが一番多く書いているといわれていますが、谷川俊太郎さんは多くて1カ月に5編です。僕も1カ月に大体1つとか2つとか、そういう形で詩を書いてきました。つまり、詩というものをつかまえるために追いかけて行って、そして一生懸命に推敲する。僕は、1編の詩を最高で160回推敲したことがあります。それをなぜかずっと記録したことがあります。そうしますと、1回目と160回目は全然違うものになっていて、その1回をまた使ったりしていたんですけども、僕もびっくりしましたが、全くの別物。一語一句、何も重ならないのです。こういう方法もあるんだなと思ったんです。

それは、結局、詩の芯というか、核というものをチョウチョウを追いかけるようにして一生懸命追いかけて、つかまえたということがわかったときに推敲を重ねて書き上がるのです。そういう意味では非常にしつこく推敲するタ

イプでした。

ところが、震災以降、そういう方法では複合震災というか、この状況、いろんな苦しみや悲しみを描くことはできないなど。いわゆる有事の状況において、いままでやっていたそういう形ではとても難しいのではないかと思ったのです。

言葉を失う人ももちろんいます。そして言葉を失うという言説が非常に多かったと思います。だけど、僕は、逆に言葉がいっぱい必要だと思ったのです。

それで、ずっと書き続けて、たくさん書き続けて、それはいろんな非難もあったり、いままで書いてきたものと全然違うものであったり、詩になっていないのではないかとか、いろんなものがあって、現代詩の方々や、ライバルなどは味方がいないのです。非常に孤独な気持ちになりました。

だけど、一生懸命にいっぱい書いて自分が思ってきたのは、この複合震災というのは、とにかく複雑で、だれも答えが出ない状況の中で、たくさん書いて、そこに何かを宿すということが必要なんだと思ったのです。たくさん言葉を目の前に並べることで、そこにもたらされるものが必要なんだと。複合震災に対する答えというのは、だれもみつけられないけれども、宿すことができないだろうかと思いました。

だから、たくさんいろんなものを書いたし、いろんなところに行っているような活動をしましたけれども、その中で宿りというものをこれから自分で探していきたいなと思っている。そういう意味では、つかまえる、追いかけるというのではなくて、宿す、そしてまたらすということをこの1年を振り返って自分の答えにしたいというふうには思っています。

あと、橋をかけるということは大変な作業で、実際去年の8月15日に「プロジェクトFUKUSHIMA!」というものを立ち上げて、パンクロッカーの遠藤ミチロウさんと大友良英さんと3人で福島に1万人の人を集めようということをしました。このきっかけというのは、残念ながら、春に避難した子どもが千葉県

園で遊んでいたときに、「福島が来たから逃げろ」と千葉県の子どもさんにいわれたということです。僕は非常に傷つきまして、じゃあ、逆に福島に1万人集めてやろうというふうにお話ししたわけです。だから、1万人というものも根拠はなかったんです。たくさんの人に来てもらおうということだった。

8月15日にそこでコンサート、野外ライブをして、1万3000人ぐらいの方にいらしていただいたのです。そのときに橋をかけるということを考え始めました。こうやって橋をかければ福島に来てくださるのだと思いました。

先週の金曜日に「プロジェクトFUKUSHIMA!」の皆さんで集まったときに、もう風化が起きているのではないかということです。風化というのはこんなにも早かったんだということで、去年の雰囲気と違うのではないかという話になった。だけど、橋をかけることはやめられないようにしようということで、今回の「プロジェクトFUKUSHIMA!」のテーマは、「橋をかける (make a bridge)」というテーマになる予定です。

僕は、教師をしているという視点がそこに入ってくるんです。言葉でいっぱい福島を埋め尽くしたいという気持ちを持ちました。その言葉に福島を鏡のように写し出して、福島の現し身がその言葉に宿ればいいというふうに分で勝手に思っていました。だけど、そういう感覚を、例えば子どもや中学生、高校生、これから福島を担う子どもたちが持って、そして文化の活動をしてくれば、時間はかかるかもしれないけれども、橋をかけるということに最後はなるのではないか。福島から、内側からくみ上がってくる若い泉のようなものを大事にしていきながら、それをかけていく。こういうことを、育てたい、育てる、分かち合うということをみんなで行っていきたいと思っています。

質問 きょうは本当におもしろい話で、聞くほどに興味深いというか、これで終わっていたくのはもったいないので、最後に1つだけ。

1つは、橋をかけるというか、温度差の話を

されましたが、温度差というのは、温度差どころではない、対立的なところも住んでいる人の間でできているやに聞いていますし、非常に大変な事態かなと。そこでどれだけ言葉というか、できることがあるのだろうかと思ったのですが、その辺、お考えを一つ。

あと、これは端的な話ですが、「福島」を片仮名で書くか、平仮名で書くか、ローマ字で書くかというときに、これは人によっていろいろ考えはあると思いますが、簡潔で結構ですので、和合さんのコメントをいただきたい。以上です。

和合さん ありがとうございます。

まず、僕はいっぱいいろんなところに取材に行って、いろんな人の話を聞きました。郡山のビッグパレットには一時2,500人の方が富岡町、川内村から避難をしてきました。そしてボランティアの方が足湯でマッサージをするというボランティアがありました。そして富岡町の方が足湯につかりながらつぶやきを漏らす、それをメモに書き取って、いま、どんなふうを考えているかとか、どんな要望があるかとか、そういうものをそのつぶやきから聞き取っていく。こういうことが、新潟の中越地震のときにあったそうなので、それを郡山のビッグパレットの避難所で取り入れていました。

僕は、そのつぶやきをみたときに、自分もTwitterでつぶやいていましたので、これは本になるのではないかなと思いました。みせてくれた方も本にしたいというふうなお気持ちを持っていました。きょう持ってこなくて申しわけなかったんですけども、ビッグパレットの写真とつぶやきというものを2つ並べた形で1冊の本になりました。

例えば、こんなふうなつぶやきがあります。これはラジオにリクエストしたいんだけど、できないという、そういうつぶやきです。60代の女性です。

聞きたい曲があるの

でも、リクエストできない

泣いちゃう
亡くなった息子がいて
その子が好きだったの
『巨人の星』のテーマ
その子の思い出も何もないの
写真も新品のスーツも
探そうにも 20 km圏内だから
もう戻れない

それを書きとめていて、この息子さんというのは多分僕と同じぐらいだと思うんです。僕も『巨人の星』を聞いて育ちましたので、同じ年ぐらいじゃないかなと思いながらそのつぶやきを拝見していたのです。

僕は、温度差というものに対して向かっていくことのひとつのかぎというのは、こういうつぶやきを集めることなのではないかなと思うのです。真っ正面から向かって言葉をぶつけ合うことも大事なんですけれども、ずっと思い詰めていたときにふっと漏れるつぶやきがすべてを語っていたりする。

例えば教育の現場で、生徒がすごく悩んでいて、ぼろっとなつぶやくように本当のことをいって、「おまえ、そんなに悩んでいたのか」とか、「先生、悪かった」とか、こういうのが毎日なんです。彼らもつぶやきが聞こえるようにいっているわけです。そういうつぶやきを思い出したときに、このつぶやきというものが言葉のしんとなって心に残るんです。これは、先ほどの話でいえば、小文字の真実なのかもしれないのですが、こういう小文字のものを集めるということをこれからもしていきたい。

それを集めることで、その温度差というものを一つの対象として客観的に見詰めることができるのではないかな。つまり、考えの違う、体験の違う、時間の違う人たちがいまいて、それは世界じゅう、日本じゅうのみならず、福島にいるわけです。同じ町の中にもいる。だけど、そういうつぶやきというものを損なわない、消し去らない、そういう文化の向きかげんというものが福島にもっともっと強く生まれるべき

なんだと思うのです。だから、それこそ橋をかけるということにそれがなっていけばいいなと思うのです。

片仮名の「フクシマ」という問題で、僕は去年の夏に、子どもたちと大人を集めて詩を書くというワークショップをしました。福島への思いを詩に書いてつなげるという「福島連詩」というものをつくりました。これは地元の福島民報、福島民友新聞などにその当時掲載させていただいたんですが、その時子どもたちも大人たちも全く変わらないんだなと思ったのです。そのとき 40 人ぐらい集まったんですけども、涙ながらに大人の方は話をするわけです。つまり、浪江出身の方とか富岡出身の方で、東京にいて、いつもニュースをみて心をさいなまれて、きょう来ていますという方なども涙ながらに話すのですが、子どもも同じように泣きながら話をするのです、いままでの思いというものを。

子どもが一番こだわっているのは、実は「福島」というのはどういう表記になるのかということなんです。これは大人が投げかけたということもあるんですけども、子どもは「片仮名の『フクシマ』は嫌いだ」というわけです。「自分が好きなのは平仮名の『ふくしま』だ」。「ふくしま」にふるさとという思いがあり、やわらかな、お母さんやお父さんのぬくもりがある。子どもたちが好きなのは平仮名の「ふくしま」というわけです。

だけど、今回、『ふるさとをあきらめない』では片仮名の「フクシマ」になっています。結局、現実には片仮名なのだと思うのです。現実をみつめるということももう一方で大事なのだらう。

僕は去年、いろいろな場面で感じましたけれども、やっぱり片仮名の「フクシマ」というふうに語られることが非常に多いです。いま、「フクシマ」で語られている。そして忘れられないことが必要なんだ。そのことを片仮名の「フクシマ」として受けとめていき、片仮名で書かれている現実を、僕は最後、平仮名や漢字にみんな戻していきたいと思っているのです。

僕は、「福島」という言葉は、震災前は、た

だ単に住んでいる場所だし、一緒に暮らしている場所だし、長年自分を育ててきてくれた場所とと思っていました。だけど、震災後は、「フクシマ」という言葉の響きというものがすべてを何か象徴するようなものになり、今回の震災のみならず、普遍的な、この日本が受けてきたさまざまな不条理な問題が「フクシマ」という響きにいま重なっています。その響きというものを片仮名から漢字や平仮名に変えていくにはどうしたらいいのだろう。それは一つの象徴された目的、目標でもあります。

司会 ありがとうございました。先ほど控え室では、和合さんに

「福島に生きる 福島を生きる」

という揮毫をいただきました。

これで終わらせていただきます。きょうは大変ありがとうございました。

和合さん どうもありがとうございました。

(文責・編集部)